

どうして土木を目指したのかと、先輩諸氏に尋ねると、決まって黒部ダム建設時の苦闘を描いた映画『黒部の太陽』を見て感動した旨の答えが返ってきた。私は、日本初となる超高層ビル（霞が関ビルディング）の建設を描いた『超高層のあけぼの』をテレビ放映で見て感激した。当時、田舎育ちで野原を駆け回っていた私には、試行錯誤し、人々のより良い生活の実現に向け、自然の驚異に立ち向かう技術者の姿が憧れであった。最先端の技術を駆使して、昔の人の知恵にヒントを得て、困難とも思える課題を克服したヒーローたちがそこにはいた。大学の教員として学生を教育する立場にあるが、この醍醐味を伝えることができていくか自信はない。就職担当の際には、学生から、「休日に休めて定時で帰れるところを教えてください」とよく聞かれた。逆に「自分のやりたい仕事はないのか」と質問すると「特に考えたことがありません」といった答えが大半であった。現在、多発する豪雨災害や地震災害に直面し、自然の猛威に対する人間の力の小ささを改めて感じている。生態系の保全も含めて、自然と共存しながらいかに快適に生活していくかを様々な立場で考えていく必要がある。非常にやりがいのある課題が存在するのだが、どうすればこの魅力を伝えることができるだろうか。いかに社会に貢献しているかを知ってもらいたい、魅力を感じてもらいたいとよく言われる。道路、ト

各 人 各 説

建設業界の魅力

北見工業大学 工学部 教授

渡邊康玄

Yasubaru Watanabe



ンネル、空港、建造物等、我々の生活にとって不可欠な施設は、生活に密着している。しかし、当然の如くそこにあり、我々に恩恵を与えてくれているので、気にも止めていない。

学生を工事現場へ連れていくこともあるが、目を輝かせて見入っている姿が印象的である。そのように考えると、建設現場をいかに見せるかが、建設業界の魅力を伝えるには不可欠な要素であるといえる。『黒部の太陽』も『超高層のあけぼの』も計画立案から完成に至る現場の様子そのものを映し出したことに今更ながら気付いた。今から十数年前にテレビ番組『プロジェクトX 挑戦者たち』が当時の中高年男性に非常に受けた（かくいう私もワクワクしながら見ていた）が、若者も興味を持った。この番組は残念ながらすべてが建設業界の話ではなかったが、「現場」の生の姿が映し出されることで建設業界の魅力が発信されていた。

しかしながら、建設中の現場は、我々が住んでいる場所から遠く離れている場合が多く、近い場合でも安全のために高い壁で仕切られた場所で行われており、なかなか人の目に付きづらい。バーチャル・リアリティを駆使することで理解してもらうことは可能かもしれない。

「どのようにしていけばよいのだろうか。今日は災害復旧現場で撮影した写真をもとに解説することにしますか」と自問自答しながら、講義に出かけている。